

<シリーズ5：Q8>

Q8：発達の順序性やその獲得と、自立活動の指導のつながり

発達の積み重ねや学びの積み上げを単純に目指すのは、「教科で指導」という点は理解しました。それでは、発達の順序性やその獲得と、自立活動の指導のつながりを、どのように考えればいいのでしょうか。

A8：まず、自立活動の目標や指導内容の設定の手続きを確認しましょう。

○自立活動の目標設定に至る手続き

- a 個々の児童生徒の実態を的確に把握する。
- b 実態把握に基づいて得られた指導すべき課題や課題相互の関連を整理する。
- c 個々の実態に即した指導目標を設定する。
- d 自立活動の指導内容から、個々の児童生徒の指導目標を達成させるために必要な項目を選定する。
- e 選定した項目を相互に関連付けて具体的な指導内容を設定する。

この手続きにおいて、発達的な視点がどう活用されるのかになります。

1. 発達的な視点の活用

学習指導要領解説においては、「課題相互の関連」を整理する際に、発達の視点の活用が必要になる、としています。具体的には、「課題同士の関連とは、例えば、『原因と結果』や『相互に関連し合っている』などの観点や、発達や指導の順序等」から検討することが記載されています。

この点に加えて、実態把握や指導内容を選定する際にも活用する可能性があります。

実態把握においては、主となるものは「障害による学習上又は生活上の困難」であり、自立活動の区分で、その困難さを検討する際に、その区分における発達の順序性が手がかりとなる場合があります。区分ごとで実態把握のチェックリストを活用している際には、そこには発達の視点が活用されていることと推測されます。

また、指導内容を選定する際にも、指導目標を踏まえて目標を実現するために、どのような土台となる力が必要になるのかの検討が欠かせません。そのためには、その目標行動の土台となる行動にどのようなものがあるのか、発達の視点での検討が必要になります。

このように、自立活動の目標や指導内容の設定の手続きにおいて、「実態把握」「課題相互の関連」「指導内容の選定」においても発達の視点は重要な手がかりとなっています。

2. 外界の知覚・認知やコミュニケーションの積み上げは、「教科」で

これらの点を理解して、自立活動の目標設定としては、発達の視点で実態把握をして、達成できそうな行動をそのまま目標にはいけないことを再確認しましょう。そのような手続きで、外界の知覚・認知やコミュニケーション行動の実態を把握し目標設定するのは、国語や算数の教科指導の手続きとなります。

つまり、手続きにおいて、発達視点を活用することはありますが、発達の積み重ねや学びの積み上げを単純に目指すのは、自立活動とは言えないことになります。

(徳永 豊、2021年8月)